私本太平記

巻一

吉川

私本 太平記 巻一

吉川英治

ちかい帖

私本太平記 巻一 あしかが帖

〔著者との申し合わせにより検印を省略します〕

昭和三十四年三月二十日 初版発行

定価 二百六十円

著者 吉川英治

発行者 山口久吉

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 大口製本

発行所 毎日新聞社

東京都千代田区有楽町一の一
大阪市北区堂島上二の三六
門司市清滝町一の九〇二
名古屋市中村区堀内町四の一

© 1959 Eiji Yoshikawa Printed in Japan

目

次

下天地蔵　三
大きな御手　二五
時の若鷹　四七
ばさら大名　六九
藤夜叉　九四
あばれ川　一三七
新田桜　一五〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

置文　一六七
なべとかま　一九四
裁許橋　二二
うつゝなき人　二三
登子　二四九
波まぎれ　二七二
不知哉丸　二九二

私本太平記　巻一

あしかが帖

毎日新聞朝刊連載

昭和三三・一・一八——三三・五・八

下天地蔵

まだ除夜の鐘には、すこし間がある。

とまれ、ことしも大晦日まで無事に暮れた。だが、あしたからの来る年は。

洛中の耳も、大極殿のたゝずまいも、やがての鐘を、偉大な予言者の声にでも触れるように、霜白々と、待ち冴えている。

洛内四十八ヵ所の篝屋の火も、つねより明々と辻を照らし、淡い夜靄をこめた巽の空には、羅生門の甍が、夢のように浮いて見えた。そこの楼上などには、いつも絶えない浮浪者の群れが、あすの元日を待つでもなく、飢えおのゝいていたかもしれないが、しかし、とにかく泰平の恩沢ともいえる事には、そこらの篝番の小屋にも、町なかの灯にも、総じて、酒の香がたゞよっていた。都の夜靄は酒の匂いがするといってもいゝほど、まずは穏かな年越しだった。

『さ、戻りましょうず。……若殿、又太郎さま。……はて、これは困った。いつのまにやら、邪気も無う、ようお寝みだわ』

一色右馬介は苦笑した。ゆり起しても、若い主人の寝顔は、居酒屋の床几に倚った儘、後ろの荒壁を背に、ぶらぶら動くだけなのである。

『これはちと、参らせすぎたな。やはりお年はお年』

右馬介は侍者として、急に自分の酔をさました。こゝは錦小路の、俗に〝請酒屋〟とも〝小酒屋〟ともよぶ腰かけ店だ。こんな所へ、御案内したと知れただけでも、あとで上杉殿からどんなお叱りを受けるかと。

かつて、自分は六波羅の大番役も勤め、都は何度も見ていたが、又太郎ぎみには、初めての御見物だ。すべてが、もの珍しくてならないらしい。

所で、こんどの上洛では、彼も驚目したことだが、なんと都には、酒屋が殖えたものだろう。

――という感を、こゝの亭主にたゞしてみたら、十年前には醸造元の〝本酒屋〟も百軒とは無かったものが、当今では洛中だけでも二百四、五十軒をこえ、その上、近江の百済寺で造るのや、大和菩提寺の奈良酒だの、天野山金剛寺の名酒だの、遠くは、博多の練緯酒までが輸入されてくる有様なので、請売の小酒屋も、かくは軒を競っておりますので、と言うことだった。

なるほど、これは自分たちの国元、関東などでは見られない。
だが、この凄まじい酒屋繁昌は、人心の何を語っているものか。たゞ単に、これも泰平の余沢といえる現象なのか。
主従しての、そんな話から浮いて、つい、
『何も土産ぞ。奈良酒とやら百済酒とやら、ひとつ、飲みくらべてみようではないか』
と、なったものだ。
これは、又太郎から、言い出した事としても、こんなに迄飲ませてしまったのは、重々自分も悪かった、と思うしかない。
『若殿、若殿。もはや相客とて、たれ一人おりませぬ。さ、立ちましょう。除夜の鐘もそろそろ鳴る頃……』
又太郎は、やっと眼をさました。醒めた顔は、いとゞあどけないほど若々しくて、唯まぶしげにニヤと笑う。そして、直垂の袖ぐちで、顎のよだれを横にこすった。
『あゝ、よいこゝちだった。右馬介、よほど長く眠ったのか、わしは』
又太郎は伸びをした。その手が、ついでに、曲がっていた烏帽子を直した。やっと現に返った眼でもある。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

その眼元には、人をひき込まずにいない何かがあった。魔魅の眸にもみえるし、慈悲心の深い人ならではの物にもみえる。どっちとも、ふと判別のつきかねる理由は、ほかの部分の、いかつい容貌のせいかもしれない。

骨太なわりには、痩肉の方である。顎のつよい線や、長すぎるほど長い眉毛だの、大きな鼻梁が、どこか暢びり間のびしている所など、これは西の顔でもなし、京顔でもない。坂東者に多い特有な骨柄なのだ。それに、幼いときの疱瘡のあとが、浅黒い地肌に妙な白ッぽさを沈めており、これも女子には好かれそうもない損の一つになっている。

けれど今、従者の一色右馬介にゆり起されて、無言でニッと見せた羞恥み笑いや、大どかな風貌の魅力さといったらない。きっとこの郎党は、この若いおあるじの為には、どんな献身も誓っているのではないかと思われる。

とにかく、醜男の方ではあるが由緒ある家の子息ではあろう。佩いている太刀なども、こんな小酒屋の客には見ぬ見事な物と、亭主もさっきから、眼をみはっていた様子だった。

『されば、お眠りはつかのまでしたが、昼、六波羅を出たばかり。さだめし、上杉殿のお内でも、この深夜まで、どこを何して歩いてぞと、お案じのことに相違ございませぬで』

右馬介の分別顔を、一方は屈託もなく笑い消した。

『ばかな、そんな心配をだれがするものかよ。こたびの上京こそは、せっかく、よい見学として、諸所、くまなく見て帰れとは、国元の父上のみならず、六波羅の伯父上も、くどいほど申された事だ。まして、右馬介も付いておる事と』

『その儀は、とく心得ておりまするが、程なく元旦にもなりますことゆえ』

『そうだ、除夜だなあ。ことしの除夜の鐘を、都で聞こうとは思わなんだぞ。明くれば、又太郎も十八才。右馬介、おまえとは幾つちがいだっけな』

『ちょうど、十才上に相成ります』

『十の違いか。わしがその年になるまでには、きっともう一度、都へ上る日があろうぞ。鎌倉のありかたと言い、眼に見た都のさまと言い、これがこのまゝの世でいるわけはない。おやじ、もう一壺、酒を持ってまいれ』

『や。そのように、お過ごしなされては』

『なぜか今夜は、腸がわしへ歌うのだ。飲むべき夜なれと、腸が申す。まあ、そう言うなよ右馬介』

分別は、こちら以上にあるお人である。きかない御気性である点も、日頃の練武修学、すべてにおいてなのだから、かくなってはお守役の右馬介も、黙って控えてしまうしかない。

と、そのとき、まるで木枯しでも吹きこんで来たように、この小酒屋の軒ばから、
『オヽ。こゝはまだ開いていたぞ。酒だ、酒だ。おやじ、それに何ぞ温い物でもないか』
と、凄まじい人々の吐く白い息が、どやどやと、土間いっぱいに込み入って来た。
たちどころに、土間は小酒屋らしい混雑と雑言で、埋まった。
十数名の武者は、みな小具足の旅姿だった。といってもあらましは、足軽程度の人態にすぎない。争いあって、一碗ずつの酒を持ち、干魚か何かを取ってはムシャムシャ食う。そしてやゝ腹の虫がおさまり出すと、こんどは野卑な戯れ口で果てしもない。
彼らには、片隅の先客など、眼の外だった。又太郎の方でも、思わぬ光景を肴として、声も低めに、ひそと、たゞ杯を守っていた。
『右馬介。……どうやら鎌倉者らしいな』
『左様で。話ぶりでは、鎌倉から紀州熊野へ、何かの御用で行った帰路の者かと察しられますが』
『む。うなずかれる事がある。先ごろ、熊野新宮へ御寄進の大釜一口に、大檀那鎌倉ノ執権北条高時と、御銘を鋳らせたものを運ばせたとか伺っていた。それの帰りの一と組だろう、この輩も』
『さてこそです。どうも最前から、犬を連れているのは妙だなと、見ておりましたが』
『なに犬を。どこに』

—犬の一語が、ふと彼らの耳を刺したとみえる。大勢の眼が初めて、ぎょろと、二人を見た。

だが、又太郎の視線とは、ぶつかり合うよしもない。

なるほど、立派な犬が人々の蔭にいたのだ。紀州犬としても優れた名犬にちがいなかろう。琥珀色にかゞやく眼、黒く濡れ光っている鼻頭のほか、全身の毛は雪を思わせる。そして大きなこと、白熊のようなと言ってもよい。

『はゝあ、御献上物だな、この犬殿も』

酒板に頬杖ついて眺めつゝ、彼の酔眼にはその犬が、だんだん、北条高時その人みたいに見えてきた。

高時が、鎌倉御所のうちで、そうであるように、この犬も、武者足軽の群臣をしたがえ、旅路にも持ち歩かせているらしい高麗縁の半畳を土間に敷かせ、その上へ、ゆったりと、尻をすえているのである。

首輪は太縒の紅白の絹づな、銀のかざり鎖。わきには、布直垂の犬飼が二人、主に仕えるごとく付添っていた。そしてこゝへ着くやいな、犬殿への供御の物を、まず第一にと、さゝげていた。

『……』

滑稽である。じつにおかしい。おそらく又太郎には、犬好きな執権の有名なる犬痴性が、この

奇妙な実在によって、よけいおかしく思い出されていたものだろう。

現執権高時の田楽（土俗的な歌舞）ずきも、狂に近いが、闘犬好みは、もっと度をこしたものである。鎌倉府内では、月十二回の上覧闘犬があり、武家やしきでさえ闘犬を養って、それを美食で肥えさすのに、憂身をやつさぬ者は少いとか。だから名犬といえば、銭百貫から数百貫の高値をよび、わけて高時自身の愛犬が、あまたの家来に護られて道を行けば、往来人は笠をぬいで、路傍にひざまずくといった風な奇観も珍らしくはないという。

『…ふ、ふゝゝゝ』

つい、又太郎は、独り笑いを杯に咽ばせてしまった。と共に、酒に酔った犬飼の手綱を抜け、いつのまにか側へ来て、自分の足もとを嗅いでいた紀州犬の鼻ヅラを見たので、いきなり足をあげて蹴飛ばした。――それは、まったく彼の意識なき衝動か、酒興の発作ではあったらしいが。人間共に仕えられて、近ごろ驕っていた犬である。

けんっ――

と、するどく悲鳴して、四肢を退くと、怒りを眸に示して、ひくく唸った。

犬以上にも驚いたのは、飲みはしゃいでいた人間共の方である。場所はせまい小酒屋の土間。

「――素破――といっても、小早い身うごきは出来ッこない。どっと、壁を背にした空間を前に作

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.